

日本國天皇家論 章 上宮聖王

日本國天皇実伝

日本國天皇上宮法皇

- (1) 法隆寺釈迦三尊佛の光背銘に記録されている人物は「上宮法皇」といわれた国王である。
- (2) その命日は西暦622年2月22日である。前年に王母が亡くなり、前日に王后が亡くなっている。この王に関する記録は「上宮法王帝説」「伊予風土記」「日本書紀」に残る。

釈迦三尊光背に記録に残る上宮法皇とはいかなる人物だったのか。上宮法皇は元号法興を定めた国家の王であった。では、奈良、大阪にこの国王の足跡が残っているか。日本書紀は「上宮太子を磯長陵に葬る」と記録している。日本書紀がいう「磯長陵」とは大阪府太子町に存在する「聖徳皇太子磯長廟」である。寺の名前は「叡福寺」である。まずこのお寺を訪問することにしよう。

叡福寺は上宮法皇を祀る



叡福寺

(1) 「日本人の心の原点・聖徳太子」(磯長山 叡福寺発行)

聖徳太子自らが廟地として選定された磯長廟は、奈良県から二上山を越えて河内に入った叡福寺境内に北側にある。叡福寺は推古天皇30年(622年)、太子の母、間人大後の眠る御廟に、太子と妃の大郎女が合葬された折り、推古天皇より方十町の地を賜り、霊廟守護のために僧坊十烟(墓守10軒)を置いたのが始まりといわれている。御陵は丘陵を利用した円墳で、石室の中央正面の間人大後の石棺が安置され、その前面東側に太子、西側に大郎女の棺が並べられる三骨一廟である。

叡福寺のガイドでは、命日は推古三十年(622)である。この命日は法隆寺釈迦三尊光背の上宮法皇の命日と一致する。また一緒に埋葬されている王母は叡福寺の記録では「間人大后」となっている。この「天后」という表記も法隆寺釈迦三尊光背銘に刻まれた上宮法皇の母「鬼前太后」と同じ表記である。

叡福寺の伝承は磯長廟に埋葬されている人物は推古三十年(622)に亡くなった国王、上宮法皇で、その母は国王の母を意味する「間人大后」であることを正確に伝えている。叡福寺ガイドでは名前を「聖徳太子」としているが、聖徳太子とは法隆寺釈迦三尊光背銘の上宮法皇である。

(2) 叡福寺の大乗会

叡福寺の行事はどのように行われているか、お寺作成のガイドを拝見しよう。

大乗会法要(四月十一・十二日)

叡福寺の最大行事は、毎年四月十一日・十二日に開催される大乗会の法要である。四月十一日(旧暦二月二十二日)は聖徳太子が薨去された日で、その御廟を守護することが目的とされる叡福寺では、太子によって大乗の法が根づくようになったことを記念して、法要を行うようになった。大乗会は河内の名利寺院や楽人の方々の協力によって法要が進められるが、その間、導師は表白・神分を唱え、問講形式で行う。

彼岸会(春分・秋分)

この行事は聖徳太子の頃に始まったといわれ、「三経義疏」にも「彼岸に到る」という言葉が見える。日本特有の行事で、亡き人々の菩提を弔う意味で修す。

月並御影供(毎月十一日)

聖霊殿に関係者が相集い、「観音経」による法要を行っている。

大乗会(だいじょうえ)は年一度の命日の法要である。寺にとって最大、最重要の行事である。その大乗会は4月11日に行われている。この日は、旧暦では2月22日に当たる。また毎月の「御影供」も11日に行われる。叡福寺は創建以来命日を守って法要を行ってきたと思われる。

4月11日(旧暦2月22日)が命日の人物は法隆寺釈迦三尊光背銘・上宮法皇である。そして上宮法王帝説「上宮法王」の命日も同じ2月22日である。また高句麗僧の言葉に残されている「上宮太子」「聖王」も同じ命日である。これらの史料では少しずつその名前を変えて記録されているが、同じ人物で、622年2月22日に亡くなって大阪太子町の磯長陵に埋葬された日本國天皇家の天皇である。叡福寺ではその命日に大乗会の法要が続けられてきた。

叡福寺・太子廟

太子廟に埋葬されている人物は三人である。

石室の中央正面の間人大後の石棺が安置され、その前面東側に太子、西側に大郎女の棺が並べられる三骨一廟

聖徳皇太子磯長廟は円墳で明治十二年の修理の時、富岡鉄舟らが堺県令税所篤の立ち会いのもとに墓の内部を実検した。その記録によると、伝承通り、三棺合葬墓であると記している。中央は王母、東に上宮法皇、西に王后と三棺が配置されている。

日本書紀には王母、王後の埋葬記録はない。だが、法隆寺釈迦三尊光背銘のよると、埋葬された三人が明らかである。光背銘では太后の命日は621年12月、王後の命日が622年2月21日、法皇の命日が622年2月22日である。王母は法皇の死の三ヶ月前に亡くなり、王后は前日に亡くなっている。磯長廟に埋葬されている三骨は法隆寺釈迦三尊佛と同じ人物である。

法隆寺釈迦三尊銘文の上宮法皇、鬼前太后、王后は大阪太子町磯長陵に眠っている。叡福寺ガイドによると、「磯長寺」「石川寺」「御廟寺」「叡福密寺」と寺名が変わり、寺の盛衰もあったと思われるが、命日の法要は代々受け継がれてきた。

日本書紀では聖徳太子の命日は2月5日としている。正史では2月5日となっているにもかかわらず叡福寺は本来の命日2月22日を守り抜いてきたという姿勢は立派というほかない。昨年までの法要は2月22日で今年からは2月5日と変更出来るはずはないが、多くの歴史的事実が日本書紀の記述にそって変更させられてきたことを想起すると、叡福寺は真実を守り伝えてきた寺と賞賛されるべきであろう。



西方院は上宮法皇の三人の侍女、善信尼・禪蔵尼・恵善尼の廟

善信尼は日本最初の尼として知られている。太子町には、古来、善信尼を祀ってきた寺がある。その寺は「南向山・西方院」と云い、叡福寺の真向かいに在る。寺の「御案内」を見てみよう。

聖徳太子御侍女三尼公御廟所西方院は、常行念仏最古の道場でお念仏の根源の地であります。
推古天皇の三十年(622)に聖徳太子御薨去のあと、月益(蘇我馬子の娘)・日益(小野妹子の娘)・玉

照(物部守屋の娘)三姫は剃髪され、その名も善信・禅蔵・恵善と称されて、太子御廟の前に一字を建立して、太子の御遺髪を納め、太子御作の阿弥陀如来尊像を安置して、ひたすた弥陀の西方浄土を欣求めされたと伝えられております。その御遺徳をしのび縁を結ぶために、宗派を問わず各地から、遺髪(毛骨)や遺骨を当山の納骨堂に納め、また追善供養として永代祠堂納めて、お位牌をおまつりし、春秋のお彼岸、太子お会式、ご命日に参詣されます。

西方院の縁起は聖徳太子についての伝承である。その没年を推古30年(622)としている。西方院の縁起に記された聖徳太子とは法隆寺釈迦三尊光背銘の上宮法皇と一致する。

西方院の縁起は上宮法皇の生い立ちの記録である。聖徳太子(上宮法皇)が誕生して、養育のため三人の姫が選ばれた。その三人の姫は「月益」・「日益」・「玉照」という名前で、父親はそれぞれ蘇我馬子、小野妹子、物部守屋だった。むろん蘇我馬子は飛鳥の最有力豪族で、物部守屋は大阪八尾を本拠とした大豪族であった。小野妹子は栄光の第一回遣隋使として海を渡った。いずれも上宮王朝の重臣であった。

この三人の姫は終生聖徳太子に仕えた。そして622年、聖徳太子が亡くなった時、三人は剃髪して尼となり、太子廟の前に「一字」を建てて聖徳太子の遺髪を納め、太子作成の阿弥陀如来像を安置して供養につとめてきたと伝える。この三人が日本最初の尼と云われる。



三人の尼、「善信」・「禅蔵」・「恵善」の墓は死後も上宮法皇に仕えるかのように磯長廟の南の岡に建てられている。このシンプルで現地状況と合致する物語が聖徳太子(上宮法皇)と三人の尼の真の物語である。

だが、日本書紀が伝える尼僧物語は全く異なる。

日本書紀・敏達天皇13年

是歳、蘇我馬子宿禰、其の仏像二軀を請せて、鞍部村主司馬達等・池邊直氷田を遣して、四方に使用して、修行者を訪ひ覓めしむ。是に、唯播磨國にして、僧還俗の者を得。名は高麗の恵便といふ。大臣、乃ち以て師にす。司馬達等の女嶋を度せしむ。善信尼と曰ふ。年十一歳。又、善信尼の弟子二

人を度せしむ。其の一は、漢人夜菩が女豊女、名は禪蔵尼と曰ふ。其の二は、錦織壺が女石女、名は恵善尼と曰ふ。馬子独り佛法に依りて、三の尼を崇ち敬ぶ。

日本書紀では尼となった娘はわずか11歳である。さらにその娘に二人の弟子が居たとは！どちらが真実か明白であろう。西方院もまた「正史」の陰で歴史の真実を伝えてきた。私たちはこれらの真実に光をあてなければならぬ。

西方院が伝える聖徳太子像を描いてみよう。

- (1) 聖徳太子(上宮法皇)は生まれた時から國王となるべく養育された。
- (2) そのために侍女として、蘇我氏、物部氏、小野氏の最有力豪族の娘が任用された。
- (3) その三人の姫は終生、聖徳太子に仕えた。そして聖徳太子の死後三人は剃髪出家して聖徳太子廟の南にお堂を建て、生涯太子の供養につとめた。そのお堂が西方院である。

大聖勝軍寺

大阪八尾市跡部に「太子堂」がある。

太子と守屋を祭る大聖勝軍寺がある。この寺は一名を下の太子という。中の太子の野中寺、上の太子の叡福寺と並んで、太子信仰の三大拠点地であった。この寺は、古伝によれば物部戦争の後に、太子によってつくられ、推古二年(594)、天皇によって「神妙棕樹山」の山号と「大聖勝寺」という寺号を賜った。・・・「神妙棕樹山」というのは、ここに棕の木があり、物部戦争の時に、太子がこの木に隠れて一命を助かったという伝承による。ここに植髪太子堂というのがあり、その本堂に太子と守屋を祭る。この守屋の像がいい。まことに雄々しい武将の姿、手に両刃の剣を持つ。そしてその後に、例の太子十六歳像といわれる像が立っておられる。この尊像は長らく秘仏で、今の住職の奥野俊雄氏になってはじめて、信者が拝めるようになったという。 (「仏教の勝利」 梅原 猛・小学館)



大聖勝軍寺の由来

用明天皇二年(587)四月「仏法に皈依する」旨の詔勅があり、崇仏派の蘇我馬子と排仏派の物部守屋が激しく対立し、守屋の本拠「淡河の館」(本寺)を中心に、河内一円を鮮血で染める民族の一大悲劇が展開された。
(「棕樹山 大聖勝軍寺」発行)

本堂植髪太子堂には守屋像がある。その写真が「仏教の勝利」(小学館)の口絵で紹介されているが、著者梅原氏が云うが如く、「まことに雄々しく」いい表情をしている。聖徳太子の像はその後に立っている。守屋は死後はまるで聖徳太子を守っているかのようである。

仏教導入を巡って、激しく戦われた宗教戦争において、若き聖徳太子(上宮法皇)は蘇我馬子と共に仏教導入の為に戦い勝利した。その勝利に感謝してこの地に棕の木で佛像を作り、自分の髪を植えた「植髪尊像」を作った。その像を祀ったのが植髪太子堂である。

この事件は上宮法王帝説には次のように描かれている。

丁未の年の六月、七月のころ、蘇我馬子宿禰大臣、物部守屋大連を伐ちし時に、大臣の軍士、尅(か)たずして退きぬ。故、即ち、上宮王、四天王像を挙げて軍士の前に建てて誓ひたまはく、若し、此の大連を亡ぼすを得ば、四王の奉為(おほみため)に寺を造りて、尊重ひ供養しまつらむと。即て軍士、勝つことを得て、大連を取り訖はりぬ。此に依りて、即に難波四天王寺を造りたまひき。聖王の生、十四年にましき。

帝説では「上宮王」、「聖王」と表記している。物部守屋と戦った時が十四歳と云う。守屋の館が在った場所に現在、大聖勝軍寺が建っている。守屋池と名のある小さな池がある。この寺は国道25号線のすぐそばで、その道を西に行けば大阪市天王寺区で、そこには難波四天王寺がある。四天王寺にも守屋を祀る守屋祠が太子堂の後にある。

広隆寺

推古十一年の記事に蜂岡寺の記録がある。秦河勝が建てた寺蜂岡寺は地名から太秦寺、法号で広隆寺といわれる。

推古十一年(603)十一月の朔に、皇太子、諸の大夫に謂りて曰はく、「我、尊き仏像有てり。誰か是の像を得て恭拝らむ」とのたまふ。時に、秦造河勝進みて曰はく、「臣、拝みまつらむ」といふ。便に仏像を受く。因りて蜂岡寺を造る。

秦氏と広隆寺について、岡本精一氏が「飛鳥寺と聖徳太子」で紹介している。

太子側近の一人、調子丸も百済からの渡来人である。百済の聖明王の弟、調宰相の子で、十三の時来日し、太子の側近として仕え、太子の愛馬黒駒の御者(舎人)となり、生涯、太子に尽くした。斑鳩宮の西北の角、今の東里に住居があったと『大和志料』に述べている。……

また百済王の豊璋は、新羅との戦いに敗れ、日本に亡命してきて大和に住んだ。その子孫は大原姓を名のり、兄弟三人で推古六年(598)に片岡王寺(放光禅寺)を建てた。

この寺名から王寺町という町名が付けられたという。百済の扶余出土の瓦とよく似た瓦が発掘され、百済と片岡王寺と関係があったことが分かる。……

また『広隆寺縁起』によると、六二三年に秦河勝が京都葛野の太秦に広隆寺を建て、太子の冥福を祈り追善供養した。その時、新羅の真平王献上の弥勒菩薩を祭った。それは宝冠のある半跏思惟像で、今も国宝弥勒像として伝わっている、と広隆寺では述べている。…

ここで少し秦河勝の祖先のことを述べてみよう。秦氏の祖先は応神天皇のころ渡来した新羅系渡来人で、淀川中流や近江愛知郡や大和・河内に住んでいた。秦一族の中では、京都葛野の秦氏が最も勢力があった。養蚕や機織りだけでなく灌漑や開墾も行った。京都の稻荷神社は秦氏が祭った神

社である。秦河勝は太子の側近として仕え、大仁の冠位をもらい、六一〇年には新羅の使者の接待役もしている。もうひとり、太子の側近として活躍した難波吉士雄成も、新羅系渡来人子孫といわれている。この雄成は、難波を中心に勢力をもっていた。そして難波に私寺として四天王寺を建てたといわれている。
(「飛鳥寺と聖徳太子」岡本精一)

- (1) 広隆寺は秦河勝によって623年に建てられた。622年聖徳太子が亡くなった翌年である。広隆寺は聖徳太子の冥福を祈ってのために建てられた。聖徳太子とは上宮法皇(法隆寺釈迦三尊)、上宮法王(帝説)、上宮聖王(高句麗僧慧慈)と尊称された人物で日本國の王であった。
- (2) その時、新羅・「真平王」献上の弥勒菩薩を祀った。それは宝冠のある半跏思惟像で、今も国宝弥勒像として伝わっている。秦河勝は新羅出身であった。故に、新羅王から弥勒菩薩像を献上されたのである。

広隆寺は聖徳太子(上宮聖王)の死後、その冥福を祈って建てられた。また聖徳太子の愛馬の御者として仕えたのは百済国王の弟で、総理大臣を務めた人の息子である。十三歳で来日して生涯太子に尽くした。当時聖徳太子と百済、高句麗、新羅との間には国際的な親交があったことを伝える。内政上、冠位十二階を制定した理由は、従来の国内の有力豪族による政権運営に変わって、百済、高句麗、新羅の優秀な人材を採用し、国際的・開明的な国家運営をおこなう政治理念を持っていたからであろう。

秦河勝と共に側近であった難波吉士雄成が建てた寺が四天王寺である。

もうひとり、太子の側近として活躍した難波吉士雄成も、新羅系渡来人子孫といわれている。この雄成は、難波を中心に勢力をもっていた。そして難波に私寺として四天王寺を建てたといわれている。
(「飛鳥寺と聖徳太子」岡本精一)

大阪四天王寺では4月22日の聖徳太子(上宮聖王)の命日に、六時礼讃堂前の石舞台で舞楽が奉納されている。難波吉士雄成が建てた四天王寺では「聖霊会」として聖徳太子の霊を慰めてきた。関西に残る聖徳太子の命日は全て2月22日である。太子ゆかりの寺は全て2月22日の命日に法要を行っている。

2月22日命日の人物は名前は「上宮法皇」「上宮法王」「上宮聖王」「聖徳太子」「上宮太子」「法王大王」と少しずつ異なるが、同じ一人の人物である。その人物は僧籍で上宮に居た日本國の王である。国王は「上宮」から「斑鳩宮」に遷った。「斑鳩宮」は法隆寺夢殿がある場所に存在した。そして「斑鳩宮」隣に法隆寺を建立した。この法隆寺は全焼したが、若草伽藍として発掘された。その伽藍は四天王寺と同様、南門、塔、金堂が南北に配置されていた。

ところが、日本書紀だけは聖徳太子の命日を2月5日としている。日本書紀がなぜこの命日としたかは不明である。日本國王の命日は622年2月22日である。日本書紀が編纂されたのは八世紀である。百年以上経過しているが、この有名な日本國の王の命日を日本書紀の編纂者が知らなかった訳はないであろう。意図的に変更したのか。その理由はなにだったのか。

田嶋家・聖徳太子画像

大阪市旭区に「太子橋」という町がある。かつてこの地方の庄屋であった「田嶋家」には、聖徳太子に関する伝承が残る。大阪市旭区民センターの郷土史料室に「太子講」について展示されている。

田嶋家の太子講

太子橋はその名の通り聖徳太子とゆかりの深い土地です。庄屋の田嶋家では、聖徳太子の命日の2月22日に太子講という太子をしのぶお祭りが行われ、人々の信仰を集めていました。このお祭りは、聖徳太子がこのあたりを訪れた時にお茶とよもぎ団子をふるまったことから始まったといわれています。今も田嶋家にはお祭りの時に用いた太子の絵伝や画像が残っています。

田嶋家の伝承でも命日は2月22日である。そして絵伝と共に、「絹本着色聖徳太子勝鬘經講讃図」が展示されている。

聖徳太子が山背大兄王や小野妹子、蘇我馬子ら5人に勝鬘經というお経について教えているところを描いたものです。

この「勝鬘經講讃図」に描かれている聖徳太子の姿は王の姿である。大阪市旭区太子橋・田嶋家に伝わる聖徳太子の伝承は日本國王・上宮聖王の姿を伝えている。しかし日本書紀は次のように記述する。

推古14年、秋7月に、天皇、皇太子を請(ま)せて、勝鬘經を講かしめたまふ。三日に説き竟へつ。是歳、皇太子、亦法華經を岡本宮に講く。天皇、大きに喜びて、播磨國の水田百町を皇太子に施したまふ。因りて斑鳩寺に納れたまふ。

日本書紀は、推古天皇が皇太子に、「勝鬘經を講かしめたまふ」と書いている。「推古天皇－皇太子」という関係で描写している。もしそうであったなら、この絵図に推古女帝の姿があつて当然であろう。しかし、田嶋家に伝わる「絹本着色聖徳太子勝鬘經講讃図」には推古女帝の姿はない。もし、推古天皇が皇太子に命じて、勝鬘經を講義させたのであれば、上位に推古天皇の姿が書かれているのが当然であろう。

田嶋家に伝わる「絹本着色聖徳太子勝鬘經講讃図」は国王である聖徳太子(上宮法皇)が臣下に勝鬘經を講いている図と読むべきであろう。

下図の人物は山背大兄王・小野妹子・蘇我馬子であると伝えている。上宮聖王の左が山背大兄王であろう。図は上宮法皇の跡継ぎは山背大兄王であることを暗示している。僧は聖徳太子の法師高麗僧惠慈であろう。



日本書紀の推古女帝－皇太子像は日本書紀が作り出した像であるが実像ではない。日本書紀は近畿天皇家に九州天皇家と日本國天皇家を一元化して編纂された近畿天皇家の史書である。この史書では日本國天皇家の独自性は失われ、古代関西に実在した日本國の偉大な国王、上宮法皇は一皇太子に位置づけられる。

六世紀末から七世紀にかけて日本に仏教を導入、その教えに従って生きた偉大な日本國王が関西に実在した。後世に聖徳太子として信仰されたのはこの偉大な王であった。

日本國天皇・上宮法皇

(1) 「法興」とは「仏法を興す」という意味を持つ元号である。6世紀末、「法興年号」を持つ国家が関西に存在した。神武天皇家には「法興」という元号が存在しない。591年から622年が法興年間である。「法興」という元号を持つ国家は神武を始祖とする九州天皇家とは異なる国家である。この「法興」という元号を定めた王の命日は622年2月22日である。この命日の王は太子町の叡福寺の太子廟に眠っている。法興の代に、日本を支配した王は日本國天皇家の天皇であった。僧籍に入って「上宮法皇」と呼ばれた。

(2) 法隆寺釈迦三尊光背銘では「上宮法皇」と刻まれ、上宮法王帝説では「上宮法王」と書かれている人物は日本國の天皇だった。この天皇は「法興」32年(622)2月22日に亡くなった。当然、即位は「法興」元年(591)である。伊予風土記には「法興」6年10月、上宮聖徳の皇と高句麗僧、恵慈が夷與(いよ)の湯に行つたと記録している。ここには「法興」年号が使用されている。ゆえに、伊予風土記の上宮聖徳の皇とは「上宮法皇」「上宮法王」と同一人物である。伊予風土記に記録された「夷與(いよ)の湯」とは日本國天皇家の「夷與(いよ)の湯」、つまり道後温泉である。

(3) 九州天皇家の系譜には、「上宮聖王」「上宮法王」「聖徳太子」は存在しなかった。



伝聖徳太子
(日本國天皇・上宮法皇)

(4) 日本書紀は「推古二十九年(621)の春2月5日に、半夜(よなか)厩戸豊聡耳皇子命、斑鳩宮に薨(かむさ)りましぬ」と書いた。名前を「厩戸豊聡耳皇子命」と書き、「皇子」のままにして「上宮法皇」とは書かなかった。また、死亡年月日も「推古29年2月5日」と書いた。「法興」年号を使用しなかった理由は、「法興」が九州天皇家の元号になかったからである。

法興元号を用いたのは日本國天皇家である。その天皇は591年から622年までの間、日本國に仏教を導入し、仏教立国を国家理念とした偉大な天皇であった。

(5) 播磨國風土記に一カ所だけ上宮法皇に関する記録がある。

印南の郡

原の南に作石あり。形、屋の如し。長さ二丈、廣さ一丈五尺、高さもかくの如し。名号を大石といふ。伝えていへらく、聖徳王の御世、弓削の大連の造れる石なり

この播磨國風土記の印南とは日本國天皇家の印南である。ここでは「聖徳王の御世」と明記している。推古の御世とは書いていない。

「聖徳王」は人々によって、國王と認識されていたのである。